

今井昭彦著

『近代日本と戦死者祭祀』

草 間 孝 廣

小泉前首相による靖国神社参拝の動向に対して外交問題をからめる世評とともに、新たな国立の慰霊施設新設の是非について今更のように世情を賑わせた。ここに戦死者に対する慰霊・追悼・顕彰の研究も深まるなか、本書はその研究姿勢の原点回帰を示すように上梓された。著者はこれまでの慰霊問題の先行研究には、総じて対外戦争における戦死者祭祀の問題に偏りがちであり、イデオロギー論争に陥りやすい空白部分がある、としてここにこそ戦死者祭祀の実態という客観的事実を踏まえることへの重要性を見出し、文献資料の発掘はもとより、各地に残る近代国内戦争の激戦地へ赴き面接聞き取り調査・墓石や慰霊碑などの金石文への実地調査も踏まえた社会的・民俗学的方法による研究を以て、その視線を「近代日本の戦死者祭祀の出发点は日本人同士が戦った戊辰の内戦にあったから、この内戦への視点が欠落しては、そもそも近代日本の慰霊問

題は語れないはずである。靖国神社の前身たる東京招魂社も、当初は内戦における政府軍戦死者を祀るために建てられたものであった。研究の多くはともこの点が軽視されているように思われる。」として、戊辰・己巳戦役の官軍《西軍》ばかりではなく、旧幕府方《東軍》への戦死者祭祀を主として繙いている。本書の概略を示し読者の便に供したい。

序章 研究史と方法・課題

一 戦死者祭祀研究史 二 研究の方法と課題

第一部 内戦における反政府軍戦死者の祭祀

第一章 会津戊辰戦役における戦死者の埋葬

——東軍戦死者を中心に——

一 はじめに 二 幕末の会津藩と戊辰戦役の勃発
三 会津鶴ヶ城をめぐる攻防戦 四 落城後の戦死者の処理 五 埋葬作業後の展開 六 むすび

第二章 越後小出戊辰戦役における戦死者祭祀

一 はじめに 二 会津軍の出陣と三国峠の戦い
三 小出島・四日町の攻防戦 四 戦死者祭祀の展開 五 むすび

第三章 己巳戦役における戦死者の埋葬

——東軍戦死者を中心に——

一 はじめに 二 己巳戦役の顛末 三 戦死者の埋

葬 四 碧血碑の建立と招魂祭 五 むすび

第四章 神風連の乱における戦死者祭祀

一 はじめに 二 反乱の顛末 三 戦死者祭祀の展開 四 むすび

第五章 佐賀の乱における戦死者祭祀

一 はじめに 二 幕末における佐賀藩の動向
三 佐賀の乱に至る経緯 四 佐賀の乱の勃発とその顛末 五 戦後処理と戦死者の埋葬 六 慰霊活動の展開と戦死者祭祀 七 むすび

第二部 対外戦争における戦死者の祭祀

第一章 道都札幌における戦死者祭祀

—札幌護国神社の創建を中心に—

一 はじめに 二 屯田兵の入植と西南戦役 三 戦死者の出現と招魂碑の建立 四 招魂碑から招魂社へ 五 札幌護国神社の創建 六 敗戦後の展開 七 むすび

第二章 群馬県下における戦没者慰霊施設の展開

一 本稿の意図 二 戦没者慰霊施設建立の発端
三 慰霊施設の多様化と統合 四 敗戦後の動向 五 むすび

第三章 昭和戦前期における忠霊塔建設について

一 はじめに 二 通牒にみる忠霊塔 三 忠霊塔を

めぐる対立 四 群馬県下における展開 五 むすび

第四章 旧藩域における護国神社の創建

—群馬県邑楽護国神社の事例から—

一 はじめに 二 館林藩の出兵と招魂祠の創建
三 招魂祠の移転と護国神社への発展 四 敗戦後の展開と戦死者祭祀の現状 五 むすび

終章 結語—「まとめ」と今後の研究にむけて—

あとがき

序章においてはこれまでの戦死者祭祀研究史として、著者の言う「靖国肯定論」の視点である、小林健三・照沼好文『招魂社成立史の研究』（錦正社、一九六八年）や大原康男『忠魂碑の研究』（暁書房、一九八四年）をその代表するものとして、対する「靖国否定論」として、村上重良『慰霊と招魂—靖国の思想—』（岩波新書、一九七八年）や大江志乃夫『靖国神社』（岩波新書、一九八四年）を示し、そうした議論のなかに前掲の「研究の空白部分」があるとしている。そして社会学者森岡清美と籠谷次郎論文「市町村の忠魂碑・忠霊塔について—靖国問題によせて—」（『歴史評論』第二九二号校倉書房、一九七四年）の研究方法を踏襲し、戦死者祭祀、特に反政府軍戦死者の実態調査と、忠魂碑・忠霊塔や護国神社、靖国神社の創建は国家統制のもと、国民の士気高揚

のためであるという村上・大江の独特な理論的見解をその調査によって実証しようというのが本書の目的とその方法であるという。

本論は大きく二部に構成され、第一部には明治維新期の内戦による反政府軍戦死者への慰霊行為の実態を、そして第二部には日清戦争に始まる対外戦争時期の慰霊施設の展開について論述している。

まず第一部では戊辰戦役時の会津と越後小出、そして函館での己巳戦役における戦況とともに、官軍戦死者には招魂場整備や墳墓造成など国家によって素早く手厚い処遇を受けながら、敵方の旧幕府方戦死者の処遇については「朝敵・賊軍」として暫く路傍に打ち捨てられそのまま野晒しにされ、その埋葬慰霊の動きが許可されるまで何ヵ月もの時間の経過があったこと、そのような中に地元の有志や僧侶等によって密かに埋葬作業がすすめられ、これを契機とした慰霊活動が今日にも続けられている現状について述べられている。著者はこうした処遇の格差政策にこそ「近代以降のこの政策が、現在の『靖国問題』の本質に関わる問題となっている」としている。

さらに戊辰・己巳戦役とは質を異にする内戦として、神風連の乱、佐賀の乱における反乱軍戦死者への処遇について考察され、その首謀者は維新の功労者にして、戦死者は

地元におけるある種の『義民』として民間有志によって招魂祭祀がなされ、昭和四十三年神風連の乱反乱軍戦死者は熊本県護国神社と靖国神社への合祀を実現のものとし、佐賀の乱でもこれよりも早く昭和二十八年佐賀県護国神社へ合祀されている。しかし、合祀された御霊は護国神社にて手厚い祭祀を受けるものの、実際の個人墓所や慰霊碑での祭祀は今日殆ど無緑化しその慰霊活動の継続には困難するであろう厳しい現状も報告されている。

第二部では、対外戦争に着眼し、北海道札幌護国神社の創設に至る事例を、それに先立つ函館での己巳戦役時に創設された、現・函館護国神社・松前護国神社・檜山護国神社の官軍戦死者墳墓を併設する招魂社の事例をもからめながらその対称性が述べられている。札幌護国神社事例では開拓と北鎮従軍を主とした屯田兵が、西南戦争に従事し戦死者となった数名が靖国神社に合祀されたことにより、札幌に於いてはこの時の病死者をも含めて慰霊する招魂碑を建立しようという動向を契機として、のちに昭和八年札幌護国神社へと変遷を遂げることから、大原康男『忠魂碑の研究』にて「招魂碑や忠魂碑は宗教施設ではない」とする主張に反証を提示したとし、忠魂碑の宗教性は否定できず、「記念碑」であるとともに、戦死者の魂を祀った完全な「宗教施設」であった。したがって、靖国神社や「地

方の靖国」たる護国神社は、「巨大な忠魂碑」であるということができるのである。」としている。さらに著者の地元である群馬県内における忠魂碑と忠霊塔など、多種多様に展開してゆく戦没者慰霊施設が建立されてゆく過程と、館林招魂祠から護国神社へと発展して行く群馬県邑楽護国神社の創設の事例を中心に、その周辺の廢橋護国神社や高崎忠霊塔、そして県民総意の機運を受け県内一円の戦死者を合祀する群馬県護国神社が指定護国神社として創設されてゆく複雑なからみを丁寧に説明されている。ここでも「戊辰の内戦における旧藩士を祀る小規模な招魂祠が、時代の流れとともに、対外戦争における戦死者を取り込んでいくことによって、地域に根ざした「地方の靖国」として、その機能を拡大していく姿が浮き彫りにされたのではないかと思う。」と、ここでも「靖国問題」の根源的な事象を見出そうとしている。

本書の結語として、これまでの研究を総まとめした上で、「こうした招魂社や忠魂碑を媒介としての、戦死者祭祀においては、単に戦死者の霊魂を「慰霊」するだけではなく、それにさらに戦死者の「顕彰」という意味が、付与されていくことが重要であった。顕彰とは、それを誉め上げなければすまない、強固な社会集団の意志を背景にした行為である。近代国家の形成過程において、顕彰を支える

集団の核は一族や郷党、そしてとりわけ国家という枠組みに向かつて収斂した。戦死者は顕彰されることで、その生きかたや行為が正当化され、そして戦争が、あるいはまた戦うことの意義が、地域社会に受け入れられていったのである。」として、「慰霊」という概念の上に地域や国家レベルでの「顕彰」行為こそ、戦争を正当化し、忠魂碑や招魂社はそのための国家統制の「宗教施設」であるとする見解を述べる。その上で各地に残る戦死者祭祀の過程と実情など検討しなければならぬと、この研究の必要性を説く。

本書は著者が国立歴史民俗博物館に提出した博士論文に加筆修正されたもので、高等学校教諭という勤めをされながら、同博物館が進める「歴史における戦争の研究」「知識体系と戦い」「近現代の兵士の実像Ⅱ」「非文献資料の基礎的研究（近現代の戦争記念碑の調査）」などに共同研究員として参画され、こうした基幹研究の成果とともに考察されたものである。その着眼点は戦死者祭祀の基礎研究として非常に重要性を秘めており、資料には残らない地元での言い伝えやこれらにまつわる信仰にまで視野を広げて調査採集されているので、だれもが見過ごしがちなこうした姿勢には、活きた調査資料、「靖国問題」基礎研究としてその評価も高いものであらうと察せられる。実際に戊辰・己巳戦役に創設由来を持つ地方の護国神社に於いてはその当時

の諸方面の關係状況、經費抛出の実態、祭式行事の内容、または墳墓が隣接していればこれに埋葬された方々の埋葬基準など、殆ど判然としない事項が多く、その研究の足掛りとしての著者のような視点と方法は非常に有効である。

もとより評者は本書を評する力量、学識ともに乏しく評者たりうる資格はないが、本稿執筆のご縁により浅学ゆえの愚考による一、二点の疑問とするところを述べさせて頂くことをご容赦願いつつ以下を述べたい。

まず、第一部では国事に殉じたとして官軍方は国家の祭祀に預かるのに、敵たる旧幕府方や反乱軍をも官軍同列の処遇をなされないことに「靖国問題」の本質に関わる問題があるとしているが、いかに旧幕府に義理があるとはいえ、藩閥の露骨な当時の政府にこれを正すべく反乱を起こしたとはいえ、世情を騒がし事件を起こした言わば犯人・罪人を国事殉難者としてその祭祀の範疇に含められるであろうか。これは「靖国問題」の本質とは別問題のように思えるがどうであろう。また、第二部では札幌護国神社事例では、当初忠魂碑形式で慰霊されていたものが後に神社形式に発展したゆえに忠魂碑は即時「宗教施設」であるという見解も早計であるように思う。この事例で著者も既述の通り、ここでは忠魂碑前庭に慰霊祭を行うも、忠魂碑即御神体・御霊代としてはおらず、招魂・招霊される対象はそこに奉

斎された「御霊代」であり、祭儀がおわれれば忠魂碑とは別に札幌神社にて安置奉斎されているのである。評者は全国の忠魂慰霊祭の祭式行事を調査したわけではないが、評者自身の忠魂慰霊祭の奉仕経験からも、必ず神籬を設けこれに対して招魂・招霊をして祭儀を奉仕している。このことは忠魂碑は招魂・招霊をし祭りを行う大切な指標であり、その忠魂慰霊祭の時だけは宗教行事を行うゆえに、臨時の「宗教施設」と言わなければならないのではあるが、厳密には祭りの対象は神籬や御霊代に招かれた御霊であるから、日常では鳥居や狛犬が設置されていたとしても「宗教施設」とは言い難く「記念碑」の概念にとどまるのではなかろうか。最後に「慰霊」に重ねて「顕彰」する行為が戦争正当化するものとしているが、元来、神祭りでも御霊祭りでも神葬祭でも、祝詞・祭詞には必ず神徳・功績が奏上され「顕彰」する言葉が述べられる。神道形式の祭りであるかぎり古今慶弔とわず「顕彰」概念が含まれる。また宗教の形式を問わずわが国民が行う慰霊行為にはその御霊に對して自ずと生前の恩顧に對し感謝の念や功績を讃え偲ぶ思いが湧き、改めてその死去を悼むゆえにここにも「顕彰」が含まれているのではなかろうか。その思いがあるから「慰霊」を行為として行わしめているのは国民性や国風なのではなかろうか。この行為者として個人・家・地域・国

家と拡大してゆくなかで、なぜに「顕彰」することが戦争正当化につながるのか評者には今一つ解せないのである。

（東洋書林、平成十七年五月、A5判、四三〇頁、本体六〇〇〇円）

（札幌村神社宮司）

矢野敬一 著

『慰霊・追悼・顕彰の近代』

高原 光 啓

近代日本の慰霊や顕彰に関する研究が盛んである。藤田大誠氏の整理（日本における慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題）、『神社本庁教学研究所紀要』第十二号）によれば、「神道学や宗教学のみならず、歴史学・社会学・民俗学・文化人類学・政治学・法学など多彩な観点から行なはれてゐる」という。こうした多様な研究がある中で、ここに紹介する本書は民俗学の立場からと位置づけられる。著者の矢野敬一氏は長年新潟県、特に岩船郡内を詳細に調査し、その蓄積を基に慰霊・追悼・顕彰に関わる諸相を考察する。その際の目的は、

近代において慰霊、追悼、そして顕彰といった事象がどのような政治的力学をはらみ、またそうした力学を通して家あるいは郷土というローカルな次元での共同性がいかに構成、もしくは再編成されてナショナルな次元へと接合されていたのか、もしくははされていない